

【研究展望】

翻訳理論の言語学的位置づけについて

松中完二*1

The History of Linguistics and Positioning of Translation Theory

Kanji MATSUNAKA

Abstract

Translation theory is a practical principle of translation techniques. However, the translation theory was not considered a part of linguistic research until Jacobson (1963) defined “translation” in his *Essais de Linguistique Générale*.

This study examines linguistic history and clarifies how translation theory was treated in the field of linguistic research. Furthermore, employing of the “dynamic equivalence” theory in Nida, I identify a useful approach to equivalent translation based on recent studies in cognitive semantics.

Keywords: 近代言語学, 翻訳理論, Dynamic Equivalence, 認知意味論

0. はじめに

翻訳理論は、現在では言語学の応用領域の一部として位置付けられる。そしてこの翻訳理論を豊かなものにするのは、言語学における意味分野での研究の発展、充実に他ならない。このことについて磯谷 孝(1980)は次のように述べている。

翻訳理論は言語理論の応用領域の一つである。両者は、後者が前者の理論的裏づけとなり、前者が後者の応用となるという関係にあるが、こうした言い方をすると、言語理論のほうが何か本格的なもので、前者は二次的なもの、悪い意味での実用的なもの、と受け取られてしまいそうである。(中略) 翻訳理論は、たしかに、言語理論が見つけた諸原理の実現にはちがいが無いが、原理はその実原において発現されるものであるから、言語理論にたずさわるものはすべてを見通して、翻訳理論家は、お釈迦様の掌中の孫悟空にすぎないというわけでは決してない。言語理論は翻訳理論に確たる根拠を与え、後者は前者を豊かにすることができるはずである。(p.254.)

磯谷のこの考えに従えば、翻訳理論と言語理論は不即不離の関係にあり、互いに助長し合う関係であると考えられる。翻訳とは、直接、言語に携わる作業である。そこには必然的に、言語の有する問題、すなわち意味、音声、統語、文体、表現形式等といったあらゆる問題が内包され、翻訳の作業にあつては、そのどれもが予告なしにあらゆる場面で出現し、翻訳者はその度に適切な方法でそれらの問題を解決することを余儀無くされる。

しかし、翻訳における最初にして最終の目標は、原語、原文の有する意味をいかにして等価な訳語、訳文の意味へと対応、再生させるかということである。翻訳作業においては、この意味の等価な移し替えこそが根本であり生命である。文体や表現形式等の表面的な現象は、これに附随する。始めに意味の完成があつてこそ、それを指し示す記号の成立が期待され得るのである。敢えて言うならば、文体や表現形式、音声といった言語における諸要素は、この意味の移し替えを有効にするための付属品にすぎない。

*1 共通教育科

令和4年9月29日受理

翻訳を学問として扱うとなれば、言語学の背景知識を無視して理論の構築は望めない。そのためここでは、言語学の中で翻訳理論がどのような過程を経て現在に至っているかを鳥瞰的に眺めることで考察の足場とする。

1. 近代言語学の成立

近代言語学の起こりは、十八世紀以前の西欧世界におけるギリシャの哲学者達にまでさかのぼる。その中でも、特にプラトン (Plato, BC427-347) とアリストテレス (Aristotle, BC384-322) が言語の研究に大きく貢献した。そしてプラトンは、言語の品詞を分類した最初の人物であるとされる。古代ギリシャの言語研究はアレキサンドリア学派 (Alexandrian school) ⁽¹⁾ に引き継がれ、ヨーロッパにおける言語研究の土台となっていく。その後ヨーロッパにおける言語研究は、規範文法⁽²⁾の研究を中心に発展していくことになる。こうした文法研究の頂点を成すのが、クロード・ランスロ (Claude Lancelot, 1615-1695) とアントワヌ・アルノー (Antoine Arnauld, 1612-1694) によって成された“ポール・ロワイヤル文法”⁽³⁾である。これは、いわばヨーロッパにおける普遍文法の地位を確固たるものとする研究と考えられている。

その後、1786年2月2日にインドのカルカッタで開かれた王立アジア協会 (the Royal Asiatic Society) において、インドの古典語であるサンスクリット語を研究していたウィリアム・ジョーンズ (William Jones, 1746-1794) がギリシャ語、ラテン語、ゲルマン語、ケルト語といった印欧諸語には、その構造上サンスクリット語と著しい類似点が見られることから、これらの諸言語が一つの共通する起源から発生したものであると結論付ける論文を発表した。⁽⁴⁾

これにより、ヨーロッパの学会にサンスクリットの知識が導入され、その後、比較文法の記述が盛んになっていく。比較文法は、印欧語に属する様々な言語に見られる様々な言語形式を比較し、次にこれら全ての言語が派生してきた仮定の祖先であるインド・ヨーロッパ祖語 (Proto-Indo-European) を確立しようとするものである。この後、フランツ・ボップ (Franz Bopp, 1791-1867) によって、サンスクリット語と他の印欧語が比較され、印欧諸語の比較が独立した学問の研究対象となることが明らかにされた。

印欧語とは、東は中央アジアから、西はヨーロッパの西端に至る地域で使用されている言語のことである。現代ヨーロッパの印欧諸語は、八つの語派に区分される。その八つの語派とは、インド・イラン語派、アルメニア語派、アルバニア語派、バルト・スラブ語派、ギリシャ語派、イタリック語派、ケルト語派、ゲルマン語派である。サンスクリット語の発見に代表される十九世紀の言語学は、十八世紀までの言語の普遍的、論理的構造を求めた学問伝統を否定し、具体的な言語資料に基づいた、より実証的な言語研究が行われるようになった。ウィリアム・ジョーンズによってなされたサンスクリット語の発見以降、二十世紀に入ると、言語学者達の関心は言語の歴史の変遷から言語の記述へと移行した。言語学者達は、時間の流れのある一時期における各言語の記述に専念するようになった。

二十世紀以降の近代言語学は、間違いなく、その発端と形成の多くをフェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913) に負っている。彼が打ち立てた構造主義言語学と称される学問は、言語のみならず、二十世紀に入ると哲学や心理学とも結び付き、様々な分野で大きな発展を遂げてきた。ソシュールの言語理論の功績は数多くあるが、そのうち主要なものを簡略化してまとめると、以下の五点に集約される。第一に、抽象的な概念であり、ある言語社会の成員に共通して内包され得る根本的な言語形成のための概念を指す *langue* (ラング) と、このラングの運用によって実現され得る個々の発話を指す *parole* (パロール)、更にはラングとパロールから成る言葉による表現・聴取活動全体そのような活動を成立させる生得的な能力までをも指す *langage* (ランガージュ) という三つの体系を明確にしたことである。⁽⁵⁾ 第二に、言語研究のあり方に対して通時的研究 (*diachronique*) と共時的研究 (*synchronique*) の、二つの枠組みを設けたことである。そしてソシュールは、前者に対する後者の研究の優位を説く。第三に、言語を記号 (*signe* シーニュ) として捉え、そこには指すところの資料を表す *signifiant* (シニフィアン [能記])、指されるところの意味内容を表す *signifié* (シニフィエ [所記]) という、二つの表裏一体の概念を体系立てたことである。⁽⁶⁾ 第四に、能記 (*signifiant*) と所記 (*signifié*) の間には、何ら必然的な結び付きは存在せず、それは恣意的なものであるとする、「記号の恣意性」と呼ばれる特質を明らかにした点である。この特質をソシュールは言語学の第一原理に置いている。

第五に、言語は相互に織り込まれた要素から入念に作り上げられた構造 (*structure*) であり、言語内の諸項目は全て、もともと相互に結び付けられたものであるとする主張を生み出したことである。これらの考えは、ソシュ

ールの死後、彼の教え子達がその講義メモを寄せ集め、*Cours de linguistique générale*⁽⁷⁾と題される書物として1916年に出版され、この書物が後年、特にヨーロッパにおいて言語学の進展に大きく影響を及ぼすことになる。

こうしたソシュールの考えを基に、ヨーロッパにおける二十世紀の現代言語学の幕が切って落とされた。しかし、そこでは翻訳理論が言語学の一領域として扱われることはなかった。そしてソシュールの考えは、ウィレム・マテジウス (Vilem Mathesius, 1891-1945) を中心とするプラーク学派 (Prague School)⁽⁸⁾、ルイ・イエルムスレウ (Louis Hjelmslev, 1899-1965) を中心とするコペンハーゲン学派 (Copenhagen School)⁽⁹⁾、ソシュールに源を発するジュネーヴ学派 (École genevoise de linguistique)⁽¹⁰⁾ といった学派によって引き継がれていくことになる。プラーク学派は主に、具体的言語素材を外界の現実との相関において捉え、コペンハーゲン学派は主に、純粋に言語自体の内的秩序を整理する自律体系の樹立を目指した形相と実質に関する考えを受け継いだ。この点、その基本的研究姿勢は、前者がパロールを中心としたものへ、後者がラングを中心としたものへと向いていると言ってよいであろう。そしてジュネーヴ学派は、特にソシュール学説の継承に重点を置いている。

一方、我が国に目を移せば、日本における言語研究は、主にアメリカにおける言語学の影響を強く受けてきた。アメリカにおける構造主義言語学の発祥と発展は、ソシュールに端を発するヨーロッパにおけるそれとは、根本的にその性質を異にする。アメリカでは、言語学は人類学の分派として位置づけられる。二十世紀の初頭、人類学者達は急速に死滅しつつあったアメリカ・インディアンの諸種族の文化の記録に従事しており、アメリカ・インディアンの諸言語は、その研究の一局面に置かれていた。彼らはそこでの未知なる言語の記録、分析の必要に迫られ、それがまさに記述の方法から、ひいては言語学の学理全体にまで及ぶ出発点となった。ここでの出発点となったのが、「アメリカ人類学の父」と称されるフランツ・ボアズ (Franz Boas, 1858-1942)⁽¹¹⁾ であり、エドワード・サピア (Edward Sapir, 1884-1939)⁽¹²⁾ である。サピアは、後年、その教え子であるベンジャミン・ウォーフ (Benjamin Lee Whorf, 1897-1941)⁽¹³⁾ とのホビ語の研究により、「サピア=ウォーフの仮説」⁽¹⁴⁾ を打ち出したことで知られる。

しかしそうした言語の記述にあっては、それらの研究の多くは足場となる確固たる指導原理がなかったために、あまり信頼が置けるものではない場合が多かった。それを一変したのが、「アメリカ言語学の祖」とも称されるレナード・ブルームフィールド (Leonard Bloomfield, 1887-1949)⁽¹⁵⁾ である。彼は *Language* (1933) において、アメリカにおける構造主義言語学の礎を築き上げた。その中でブルームフィールドの取った考えは、言語を自然科学的研究手法において捉え、言語学は観察可能な資料を客観的かつ体系的に処理すべきであるというものである。そこでは、言語の意味よりも項目の配列様式により多くの関心と研究の重点が置かれた。そして言語学における意味の研究は、極めて曖昧かつ漠然としすぎたものであり、厳密な分析方法で処理することが不可能であると考えたのである。ブルームフィールド(1933:140)は、この点について次のように述べている。

The statement of meaning is therefore the weak point in language-study, and will remain so until human knowledge advances very far beyond its present state. In practice, we define the meaning of a linguistic form, wherever we can, in terms of some other science. Where this is impossible, we resort to makeshift devices. One is *demonstration*. If someone did not know the meaning of the word *apple*, we could instruct him by handing him an apple or pointing at an apple, and continuing, as long as he made mistakes, to handle apples and point at them, until he used the word in conventional way. This is essentially the process by which children learn the use of speech-forms. If a questioner understood enough of our language, we could define the word *apple* for him by *circumlocution* that is, in the manner of our dictionaries, by a roundabout speech which fitted the same situations as does the word *apple*, saying, for instance: "The well-known, firm-fleshed, smooth-skinned, round or oblong pome fruit of the trees of the genus *Malus*, varying greatly in size, shape, color, and degree of acidity." Or else, if we knew enough of the questioner's language, we could answer him by *translation* — that is, by uttering a roughly equivalent form of his language; if he were a Frenchman, for instance, we could give *pomme* [pom] as the meaning of *apple*. This method of definition appears in our bilingual dictionaries.

ブルームフィールドの影響は強大なものであり、分布主義という名のもとに、その後約二十年以上にわたって彼の考え方に従った言語研究の時代が続くこととなる。*Language* の中で述べられた理論と方法の解明と検討に時間が使われたという点においては、1933年から1950年頃までの期間は、アメリカ言語学の中で「ブルームフィ

ールドの時代」とも呼べる時期である。実際、この間に多くの言語学者達は、資料とした発話から意味に頼らずにその言語の音韻上及び統語上の規則性を研究することで、採集した発話の資料全体を分析することが言語研究の本質であるとする考えに基づき、多くの研究を行っている。⁽¹⁶⁾

しかし、非言語的基準を言語の文法的記述の中へ取り込んでではないとする彼の主張や、こうした意味の捉え方はあまりに行動主義的すぎ、人間の内面における精神作用への考慮を欠いたものとしてしばしば批判の矢面に立たされることとなる。しかしながら当時のブルームフィールドにあって、意味を可能な限り客観的に記述可能なものとしようとした結果、意識的のこのような主張をせざるを得なかったと考えるべきであろう。また彼が示した人間の言語行動が目的志向的⁽¹⁷⁾なものであるとする考えは、現在の「語用論」や「談話分析」といった学問の根底に流れる考え方と基本的に軸を一にする。この点からも、現在の言語研究は、今なおブルームフィールドの示した方向に沿って進んでいると考えられる。加えて、ブルームフィールドにしてもサピアにしても、いわゆる構造主義以前のアメリカの言語学者達の研究方法は、いずれもソシュールに範を取るヨーロッパにおける言語研究の伝統を踏まえていた。特にブルームフィールドは、ソシュールの *Cours de linguistique générale* を検討し、そこで明らかにされた「言(parole)」と「言語(langue)」という区別を高く評価している。そして彼は後者の中に科学的に取り込みやすい知識の総体を認めている。彼にとって「言語(langue)」は、日常の話し言葉の流れから抽出された超個人的体系で、同一の言語社会の全ての成員に共通の様相のみを組み入れたものであり、それは研究対象となり得る一般的かつ厳密な合成物たり得たためである。しかも、この体系が単に一言語社会の言語活動の総和であるだけでなく、言語的記号として機能する類型の体系であったことは、彼にとって論理的にも重要な要素となったのである。それ故、ソシュールの理論は、記述、もしくは構造言語学についてのブルームフィールド自身の考え方を形成する根幹となったと考えてよいであろう。勿論、ブルームフィールドはボアズ、サピアといった二人の人類学者が創始した記述言語学の方法にも精通していた。彼は、科学的に容認され得る言語分析の方法だけでなく、史的言語学の基本的前提を範疇的に見出したのである。彼は、ヤーコブ・グリム (Jakob Grimm, 1785–1863)⁽¹⁸⁾ による音変化から音類型へいたる体系的変化の上に規則性、すなわち文法という原理を加えていった。

こうした変化は、個々の話し手の範疇に捕われないものであり、そうした全体の変化の中にソシュールが“langue (言語)”と呼んだ抽象的音体系が包括されている。それ故に構造主義言語学は、音から文法へのアプローチを試みる方法以外の何ものでもなかった。これは、アメリカ構造言語学が、アメリカ・インディアン⁽¹⁹⁾の未知の言語を記述、分析し、その書記体系の確立を目指す性質が強いものであるという事実からして、こうした研究のアプローチの仕方は当然かつ有効な方法論であった。しかし、そのようにして文法をいくつも書いているうちに、彼自身、これまでの方法論では解決し得ない問題が数多く起ってくるようになる。またブルームフィールド学派に属する言語学者達は、言語学の方法論の基盤を設けたと同時に、分析に関する些細な問題が論争の主要点になり、他の学問との接触を失い、言語学は狭い領域のみの学問となってしまった。

2. 翻訳理論の誕生

翻訳という実務的な作業が言語学に位置付けられ、初めて学問として扱われたのはプラーク学派に属するローマン・ヤコブソン (Roman Jakobson, 1896–1982) の *Essais de Linguistique Générale* (1963) においてである。ここにおいて、翻訳という作業の特質が言語学との位置付けによって初めてその姿を出現させる。数世紀にわたる言語学の長い歴史の中で、翻訳の学問としての理論的構築は、ここによくその出発点を見る。ただしヤコブソンは、そこでは言語内翻訳、言語間翻訳、記号の翻訳という、わずかに翻訳の三種類について定義したにすぎない。ヤコブソンは、*Essais de Linguistique Générale* で次のように定義している。

- 1) La traduction intralinguale ou reformulation (*rewording*) consiste en l'interprétation des signes linguistiques au moyen d'autres signes de la même langue.
- 2) La traduction interlinguale ou traduction proprement dite consiste en l'interprétation des signes linguistiques au moyen d'une autre langue.
- 3) La traduction intersémiotique ou transmutation consiste en l'interprétation des signes linguistiques au moyen de systèmes de signes non linguistiques.”

ここで言語学の一研究領域となる翻訳理論の礎が築かれたと言えよう。ヤコブソンの行った翻訳の定義は、二つの点で意義を持つ。一つ目は、その定義によるところの「言語内翻訳」、「記号間翻訳」にのっとって、古典の現代語訳や、小説の映画化等を積極的に翻訳として考察していく道筋を開いたことである。二つ目は、翻訳という作業が「意味」を生み出す、あるいは「意味」は翻訳という操作によってしか記述され得ないという態度を明確に打ち出したことである。この点で翻訳は、原文の模倣という従属的な立場から解放されたことになる。それ故、現在でも翻訳を理論あるいは学問として扱う書物は、必ずこのヤコブソンの翻訳の定義から出発するし、またそうせざるを得ない。それは後年、翻訳理論の祖とされるナイダ(Eugene Nida, 1914—2011)にあっても同様で、彼の理論を不動のものとした *Toward A Science of Translating* (成瀬武史訳『翻訳学序説』) においても、最初にヤコブソンの定義を明確化した上で持論を位置付け、また展開している。

同時に、意味部門の研究として翻訳理論に応用され得るのが、チャールズ・フィルモア (Charles Fillmore, 1929—) の「格文法 (case grammar)」であり、内容と表現形式の部分ではユージン・ナイダの「動的対応訳 (Dynamic Equivalence)」である。フィルモアの格文法は文中の動詞に注目し、その動詞の動作の主体となり得るものがどのような名詞であるか、また動作の及ぶ対象はどのような名詞であるかといった、意味論的な立場から文中の語の関係を記述しようとするものである。意味を中心としたこの格文法が、特に日本語の解析にも役立つものであることが判明したため、自動翻訳機の開発に応用されるようになる。1970年代から今日に至るまで、コンピュータによって用いられている日本語の解析の多くは、この格文法がそれぞれのシステムに適用する形に変形されたものによるものであるといっても過言ではない。

一方ナイダの「動的対応訳」は、表現形式と意味、更にそれとの関わりでの社会、文化といった部分にまで立ち入って翻訳を理論化したものである。彼の理論は機械翻訳にこそ応用されなかったものの、その有効性は学問として翻訳を理論付けたことで立証されている。具体的にはナイダ自身が聖書翻訳教会の人間であったことから、その理論の着眼点は聖書翻訳における表現形式と意味の一致、すなわちナイダ(1964)の言葉を借りれば「等価な翻訳」といった点に置かれていた。本来、形態論をその研究題材としていたナイダは、*Toward a Science of Translating* (1964), *The Theory and The Practice of Translation* (1969) でその理論を打ち出した。ナイダは、その後の翻訳理論で始祖として扱われる。ナイダは、翻訳には種々のレベルがあると考え、その一つは言語学に立脚するもので、与えられた文の単語と構造とを他言語の対応する単語と構造に移し替えるもので、この方法はマッピング(mapping)と呼ばれる。これは言い換えれば、統語論的翻訳と言うことが出来よう。二つ目はコミュニケーション理論の立場に立脚するもので、発話文の持つ意味が同一になるように他言語の文を作り出そうとするものである。これは言い換えれば、意味論的翻訳と言うことが出来よう。三つ目は社会言語学的な立場に立つもので、ある発話文がその社会で理解され、それが与える種々の効果と同一のものを他言語においても生じさせるような翻訳文を創出するという考え方である。これは言い換えれば、語用論的翻訳と言うことが出来る。そしてナイダが取る立場は、この第三の語用論的立場に立った翻訳理論である。故にナイダは、その専門上聖書翻訳に携わりながらも、聖書の翻訳は原文の形に固執することなく、最もうまく内容、感情等を伝えられる形で意識を行うべきであるとするのである。

ナイダは、「翻訳とは原語で表現されている内容をそれにもっとも近く自然な受容言語で再現することであり、まず意味内容の点で、次に文体の点で原語と受容言語が実質的に対応するようにする」(沢登春仁・升川 潔訳, 1973:14) ことを第一義とし、形式の対応のために内容を犠牲にするのではなく、その逆の内容重視の対応を提唱している。こうした考え方をナイダは「ダイナミックな等価性 (dynamic equivalence)」と呼ぶ。この「ダイナミックな等価性」とは、ナイダによれば、「翻訳の形式よりも内容を重視した、最も自然で最も原文に近い翻訳で、原文の読者が感じるのと、本質的に同じ感じを読者に抱かせるようにするため、縦横無尽に工夫をこらした表現」(前掲書 p.218)と定義付けられている。別の言い方をすれば、翻訳とは発話文の持っている意味、感情、芸術性等の全てが翻訳言語の世界に完全に移されるような表現を創出することであり、これを実現させるためには、まず発話文を完全に理解し、その発話文から離れた理解の世界を一旦作り、そこから翻訳言語の世界においてその理解の世界を文章によって再構築するという考え方である。言うならば、一方の文化から他方の文化への物事の考え方の変換・伝達であり、ナイダのこうした姿勢は、芸術性を重んじる文学作品の翻訳においては極めて重要な位置を占める。またナイダ自身は、発話文から離れた理解の世界を「核文 (kernel level)」と呼び、その理論の中で訳文の生成される過程について翻訳のモデル図を用いて解明しているが、詳しくは別の機会で考察する。

ナイダの理論の長所は、一般言語学的研究と聖書翻訳を通して理論と実践のバランスが非常によく取れている点にある。同時に、この理論によって翻訳そのものの研究の幕が切って落とされたと言ってもよい。そのため、その後に出版される数々の翻訳理論書は、すべからずこのナイダの理論に立脚することで、表現形式と意味の等価性といった観点から翻訳が扱われるようになる。またそれ以降の翻訳理論としては、ナイダの直接の弟子でもあり、ナイダ理論を継承する第一人者としてノア・ブランネン (Noah S. Brannen, 1953-2003) の名前があげられる。彼の日本文学とその英訳を題材とした研究は、その後の翻訳理論においてより現実世界との関わりの中で翻訳の成立基盤を確立したという点で優れたものである。また 1980 年代、1990 年代には数多くの翻訳理論が著されるが、それらはどれもナイダの理論の焼き直しであったりその補足であったりといったものが多く、その点ではナイダの理論を押さえることで、現代の翻訳理論の礎を理解することが可能である。

しかし我が国においては、ナイダと特に彼の教え子であるブランネンの影響と、実際に翻訳の実証を行える立場にいる人間がいわゆる文芸翻訳家といった人達であったことや、文芸作品の翻訳の人気といった社会的風潮も手伝って、翻訳理論、特にその実証部分は文学作品の芸術的観点からの翻訳に終止する方向に傾斜してきた。そのため、そこでは必然的に書き言葉における表現形式と意味といった部分での翻訳が主たるものとなり、ここからその後に出される翻訳を扱った図書は、単なる技術書としての性質を色濃く持つものや、あるいは異文化間コミュニケーションの分野で翻訳の有する実用性を謳ったものが横行し、言語が本来有している問題点や意味の観点からの翻訳の本質を扱うといったものはその姿が見られなくなる。こうして翻訳理論は、次第に言語学との接点を失っていった。

また、翻訳理論が言語学との結び付きを弱めていったもう一つの理由に、言語学における意味の部門の研究解明の遅延が上げられよう。何故なら翻訳理論における最終目標は、それが文字であれ音声であれ、等価な意味の移し替えであり、言語学における意味の部門における研究の発展と翻訳理論は密接な関係を有している。言語学における意味の記述、解明といった部分での研究の発展は、他言語におけるそれとの照合、検証によって、多くの部分が有効な翻訳理論となり得る。しかし実際には、翻訳理論はその多くが表現形式の是非にかかずらうのみで、等価な意味の移し替えとそこで生成される訳語の記述という部分で欠落が見られる。そしてそれに呼応する形で、構造主義言語学においては、意味の分野での研究は混沌としたままであった。

3. 現在の言語学の動向と翻訳理論—むすびにかえて—

近代言語学の歴史を簡単に辿りながらその方向を見てきたが、科学としての言語学が最終的に目指すものは、言語の説明理論である。そしてそれによって、言語を介在とする人間の意思疎通の過程を解明することである。近代言語学の最初の百年は、歴史的存在としての言語がその中心的問題とされ、次の五十年では生物学的必然としての言語習得及び言語運用に焦点が当てられた。ここでは、人間の有する言語の知識がどのようなものであり、それがどのように獲得され、使用されるかを客観的に模式化する生成文法が中心的役割を担ったのは、ある種必然的結果であった。しかし生成文法は、文の形式のみをその研究対象とすることで、自然言語の意味や機能といった部分の多くを排除し、極めて限定された対象のみを問題として扱ってきた。そのため、コミュニケーション過程としての言語現象も、その多くが言語の科学から外されてきたことは否めない事実である。

生成文法理論は、人間の有する言語知識の解明を目指すための理論であり、人間が言語を介在としてどのように、また何故コミュニケーションを取ることが可能であるかといった言語現象を解明するための理論ではない。また現在、生成文法は、例文の体系的な判断しか有効性のある方法を持っていない。従って、言語知識や言語獲得の問題と、言語の使用やそれを基にしたコミュニケーションの問題は、ある種、独立したものとして考えるべきであろう。人間がいかにして言語によってコミュニケーションを可能にするのかを探るためには、生成文法とは別の理論的枠組みが必要になる。

こうした限界に突き当たり、言語と認知という視点から言語現象の解明を目指したのが、80 年代から台頭してきた、いわゆる「認知言語学 (Cognitive Linguistics)」と呼ばれる学問である。認知言語学は、言語が人間の認知機構と深い関わりを持つという立場を取る性質上、特に心理学的な概念をその基本に置き、とりわけ知覚心理学や認知心理学との関わりが深い。特に、ウェルトハイマー (Wertheimer, 1880-1943) の *Experimentelle Studien über das Sehen von Bewegung* (『運動視に関する実験的研究』1912 年) という論文に端を発する、「心理現象を構造化された全体性で捉えるべきである」という考えに立った「ゲシュタルト心理学 (Gestalt Psychology)」の領域で明らかにされた概念が言語現象とその認識の解明に応用されることが多く、それまでの生成文法を中心とする言語

学の流れとは明らかに一線を画する。認知言語学の特徴は、L. ウィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein, 1889–1951) の後期の言語理論や E. ロッシュ (Eleanor Rosch, 1943–) のカテゴリー理論等の言語と認知に関する哲学、心理学等の関連分野の研究成果を取り込み、広範で多様な言語現象に対する理論体系を構築しようとする点にある。

生成文法では、統語論における文法の自律性を基本的な前提とするのに対して、認知言語学では、文法を有意義な単位から構成される記号体系の一種と見なす。この見方は、認知モデル、メタファーによるカテゴリーの拡張等を構成原理とする、日常的な概念体系の反映としての文法を生成することへとつながっていくのである。認知言語学では、意味を生成文法による分析で想定されていたような真理条件的なものではなく、表現者による状況の捉え方とその認知過程を必然的に含んだものとして捉える見方の相違から生じるものである。

心的役割を担うのは、意味現象の解明のための意味の認知という観点からの言語の研究である。それは、これの生成文法を土台とした意味研究とは自ずから異なった性質を有し、ここでは発話行為とそれに伴う言語現象、さらにはそこから生成される意味とその認知の解明を目指すものである。近年、平沢慎也・野中大輔(2022)など、認知文法を基にした翻訳へ言及が見られる。平沢と野中は認知文法と用法基盤モデルの視点を取り入れて翻訳のダイナミズムを説明づけようと試みるが、Nida の動的対応訳と本質的には変わりがないと思われる。そしてそうした意味の研究の充実こそが、とりもなおさず翻訳理論の進展へとつながるものであることは間違いない。

*本研究は、2021年度～2022年度久留米工業大学学長裁量費(研究課題「音と意味と文字の関連性から見る日英語の多義の原理についての意味論的考察」)による研究成果の一部である。

注釈

- 1 ゼノドトス (Zenodotos, BC323 頃–?), アリストファネス (Aristophanes, BC257–180 頃), アリスタルコス (Aristarkhos, BC217 頃–145 頃), ディオニュシオス・トラクス (Dionysios Thrax, BC200 頃) の四人を中心として、プトレマイオス朝 (BC323–AD30) 治世下のエジプトの港町アレキサンドリアで、ギリシャ古文獻、ギリシャ語の研究に従事し、その後のギリシャ語文献学及び文法学の基礎を築いた学派。
- 2 文法研究には、大きく分けて規範 (伝統/学校) 文法、構造 (主義) 文法、生成変形文法の三つの方法がある。規範文法は、「いかに正しく書くべきか」ということを最重要課題とする。これは、十七世紀頃から盛んになり、良い文章の見本を示す外国語のテキスト、特に外国語教育に主として用いられることから学校文法という別称で呼ばれることもある。ここでの分析方法は、形式、機能、意味の三要素に基づいて行われ、それは往々にして主観的、思弁的かつ哲学的である。十九世紀頃には、「科学文法」と称されたこともあった。構造(主義)文法は、紀元前のサンスクリット語文法の記述にもその萌芽が見られるが、帰納的方法を用いて収集し得る限りの言語資料を集め、これらを分類、整理、記述する方法を取る。客観性を重んじるため、形式と分布だけを扱い、主観的要素の介入する余地が残る意味を分析の対象とはしないことを原則とする。
- 3 1637年–1660年の間にベルサイユのポール・ロワイヤルで成立した知識人、宗教家の集団に属する学者たちによって、言語の普遍的特性の本質について書かれた研究書を指す。最も影響力のあった論文が、ランスローとアルノーの手による *Grammaire générale et raisonnée* (一般論理文法) (1660) である。これは、言語の普遍性と類型論を簡潔にまとめたもので、言語の恣意的な性質に焦点を当てている。一方、言語が論理や現実とどう関係するかといった問題は、ここでは扱われていない。
- 4 「インド人について」と題された講演の中で、ジョーンズは「サンスクリットは、その古さはどうあろうとも、驚くべき構造を持っている。それはギリシャ語よりも完全であり、ラテン語よりも豊富であり、しかもそのいずれにもまして精巧である。しかもこの二つの言語とは、動詞の語根においても、偶然作り出されたとは思えない程顕著な類似点が見られる。そのあまりの顕著さ故に、言語学者は、これら三つの言語を調べたら、それらは恐らくもはや存在していない、ある共通の源から発生したものと信じない訳にはいなくなるであろう。これは、それ程確証の持てるものではないが、同じような理由から、ゴート語やケルト語も、共にサンスクリット語と同じ起源を持っていると考えられる。また、古代ペルシア語も同じことが言えよう」といった主旨を述べた。この講演内容が彼が編集する研究誌「アジア研究」の創刊号に掲載され、広く世の中の目に留まった。これにより、インド・ヨーロッパ祖語と呼ばれる一大語族に属する印欧諸語の比較研究が盛んになる。
- 5 この箇所は、小林英夫訳『一般言語学講義』(岩波書店, 1940) の「解説」中で、次のように述べられている。「ものをいう行為と、われわれがものをいうために用立てる口頭のまたは書写的記号の体系とは、明らかに別個の事実である。この

二つの事実にたいしてただ一つの名前しか与えない言語もあるが、フランス人は前者を *langue* と称し、後者を *language* ととなえている。Saussure の言語学理論はこのような常識的区別の科学的精練から始まる。かれによれば、*language* 「言語活動」はそのままでは混質的であって、分類原理をなさない。われわれはそこに社会的部面である *langue* 「言語」と個人的部面である *parole* 「言」とを見分け、それぞれを対象とする二つのあいことなる学科を立てる必要がある。」

- 6 この箇所は、小林英夫訳『一般言語学講義』(岩波書店, 1940)の「解説」の中で、次のように述べられている。「言語は一つの記号体系にはかならない。さて記号はいつばんに、指すところの資料と指されるところの意味内容とからなる。この二つの要素はそれぞれ能記、所記と名づけられる。言語のばあい、能記は聴覚映像であり、所記は概念である。両者はともに心的なものである。さてこの二つの要素の間には自然的関係は成り立たず、それは恣意的であるという特質がある。この特質を、Saussure は言語学の第一原理に立てるのである」
- 7 我が国での邦訳には、小林英夫訳『一般言語学講義』(岩波書店, 1940)、山内貴美夫訳『言語学序説』(勁草書房, 1971)の二冊があり、小林訳がつとに有名である。
- 8 20世紀の20年代から、約半世紀にわたってチェコのプラハで展開された構造言語学の有力な一派で、正確には「プラハ言語学派」という。研究対象となった言語はスラヴ語と英語を中心とするゲルマン語で、具体的な言語資料を外界の現実との相関において捉えようとする研究姿勢を取った。初期には音韻論、後にはその他に曖昧性、文語の理論、詩の言語、対照言語学、言語類型論と研究分野を拡大し、更には言語学で得られた機能構造的な研究方法を文芸理論、民話の領域に適用して大きな業績をあげている。この学派の創始者達は、自らの特別な言語研究の方法を「音韻論 (phonology)」と呼んだ。彼らの定義するところによれば、音声の機能の研究を中心とするもので、それ故にこの学派の人間は「機能主義者 (functionists)」と呼ばれることがある。
- 9 1930年代に、デンマークでイェルムスレウとブレンダルを中心に結成された「コペンハーゲン言語学サークル」を出発点として、「言理学」と称する言語理論を発展させ、プラーグ学派、アメリカ構造言語学と並ぶ国際的な構造主義言語学の一派。コペンハーゲン学派という名は便宜上つけられたもので、その実際はデンマークのコペンハーゲン大学を中心とする言語学者の集まり(サークル)にすぎない。ソシュールの二つの命題、すなわち 1.言語とは価値の体系である、2.言語は形態であり実体ではないという考えをその基本的姿勢として、純粋に言語自体の内的秩序を整理する自律体系の樹立を目的としている点に特徴がある。そこでは、あくまで内在的に言語の奥に伏蔵されている機能的秩序の解明を目指すべきであり、それによってのみ言語的普遍が把握され得ると考える。そのため、ソシュールの言うラングとパロールの区別は、形式はラングのものであるとする立場を取り、必然的にパロールを研究の対象としない姿勢を取る。
- 10 これは、スイス、ジュネーヴ出身で、ジュネーヴ大学で比較言語学・一般言語学の教鞭を取ったソシュールに端を発し、ジュネーヴを活動の中心とした言語学派を指す。
- 11 「アメリカ人類学の父」と評され、アメリカ人類学の性格、方向づけに最も大きな影響を及ぼした人類学者、言語学者である。アメリカ・インディアン語の研究から生まれたボアズの言語学の特徴は、その相対主義にある。ボアズは、それぞれの個別言語に内在する構造を抽出した記述の必要性を強く主張した。言語に関するボアズのこうした考えは、その弟子であるサピアによって特に強く発展させられた部分が少なくない。ボアズはその後、北西海岸インディアンの世界に没入するにつれて、弟子のサピアらとは対照的に、言語の歴史的再構や系統分類の可能性に懐疑的となり、言語の複源性、混交に確信を深めていったが、弟子達の中にこの考えを受け継ぐものはいなかった。
- 12 その師であるボアズとともに、アメリカのフィールド的言語学と人類学の黄金時代を築いた中心人物である。他方、ブルームフィールドと共に、アメリカ構造言語学の始祖とも称される。
- 13 サピアに師事し、アステカ語、ホピ語、マヤ語を研究した。また「サピア・ウォーフの仮説」を打ち出したことでも有名である。
- 14 これは「言語相対性仮説」(linguistic relativity hypothesis)とも呼ばれ、言語は語彙的に言語外現実を反映し、それ故に言語の認知的機能は一定の選択によってなされる言語外的世界の範疇化にあるとする考えである。言うならば「言語は、単なる伝達の手段ではなく、思考の手段でもある」という主張であった。ウォーフによれば、言語によって世界を認識する以上、世界がどのように見え、どのように理解されるかは、その言語の有する性質によって決定されるということになる。外界をどのように捉え、認識するかは使用する言語によって左右されるかどうかといった問題は、古くはアリストテレス(B.C.384~322)の時代からしばしば論じられてきた。アリストテレスが人間は言語に規定されることなくそのまま外界を認識することが可能であると考えたのに対し、フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)やヴァイスゲルバー(Leo Weisgerber, 1899-1985)らは、使用している言語によって外界の捉え方が相対的に異なり、異なる言語を用いている人間はその外界の認識の仕方や思考様式が異なっているのではないかと考えた。後者の考え方は、ドイツ生まれで後にアメリ

かに渡った文化人類学者であるボアズ (Franz Boas, 1858–1942) に受け継がれ、さらにその教え子であった言語学者・文化人類学者のサピア (Edward Sapir, 1844–1939) とウォーフ (Benjamin Lee. Whorf, 1897–1941) に継承された。

- 15 サピアと共に、アメリカ構造言語学の始祖と称される。元来、ゲルマン語学者であり、比較言語学者であったが、印欧語族の言語だけでなく、タガログ語やアルゴンキン語のような非印欧語族の言語にまでその研究対象を広げた。比較言語学者として出発したが、言語研究の一般原理の考察を通して、共時言語学を言語学の基本であると確信するようになる。
- 16 ここでは、ケネス・パイク (Kenneth Lee Pike, 1912–) とユージン・ナイダ (Eugene Albert Nida, 1914–) の名前がその顕著なものとして挙げられるであろう。パイクはタグミーミックス(tagmemics)を提唱し、言語の記述と分析に貢献した。その著書には、*Phonetics* (1943年) (今井邦彦訳『音声学』研究社, 1967年), *Phonemics* (1947年) などがある。またナイダは、アメリカ聖書協会を拠点として、メキシコ・インディアン言語から豊富な例を集めた *Morphology: The Descriptive Analysis of Words* (1946年) と題する、形態論分析の実用的手引書を著している。
- 17 ブルームフィールドは行動主義の立場に立ち、刺激と反応という観点からこれを説明する。言語は刺激と反応を基に、行動主義的に発せられるものであるとするのがブルームフィールドの主張である。
- 18 グリム童話で有名なグリム兄弟の長兄。グリムの業績の中心をなすものは、『ドイツ語文法』、『ドイツ語史』、『ドイツ語辞典』の三種類の著作である。

引用・参考文献

- Aitchison, J. (1995). *Linguistics : an introduction*. London : Hodder and Stoughton, London. (田中春美・田中幸子・若月剛訳. (1998). 『改訂新版入門言語学』金星堂.)
- Bloomfield, L. (1933). *Language*. New York: Holt, Rinehart and Winston. (三宅 鴻・日野資純訳. (1962). 『言語』大修館書店.)
- 千野栄一. (1972). 「アメリカ言語学の発達—ヨーロッパ言語学との関係—」『英語教育』1972年1月号. pp.38-41. 大修館書店.
- Culler, J. (1976). *Saussure*. UK : Fontana, Collins. (川本茂雄訳. (1978). 『ソシュール』岩波現代選書.)
- Ducrot, O. (1968). *Le Structuralisme en linguistique*. Seuil, Paris. (井村順一訳. (1968). 「言語学における構造主義」) (François, W. 他. (1968). *Qu'est-ce que le structuralisme?* Paris: ditions du Seuil. (渡辺一民他訳. (1978). 『構造主義 言語学・詩学・人類学・精神分析学・哲学』 pp.9-88. 筑摩書房.))
- Fillmore, C. (1966). Toward a modern theory of case. In Fillmore CJ. *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*. pp.361-375. New Jersey:Prentice-Hall. (田中春美, 船城道雄訳.1975. 『格文法の原理 : 言語の意味と構造』三省堂)
- Gadet, F. (1987). *Saussure, une science de la langue*. PUF, Paris. (立川健二訳. (1995). 『ソシュール言語学入門』新曜社.)
- Gleason, H. A., Jr. (1961). *An Introduction to Descriptive Linguistics*. Rev. ed. New York: Holt, Rinehart and Winston. (竹林 滋・横山一郎訳. (1970). 『記述言語学』大修館書店.)
- Grimes, J. (1975). *The thread of discourse*. The Hague: Mouton.
- 服部四郎. (1960). 『言語学の方法』岩波書店.
- 林 栄一・小泉 保. (1988). 『言語学の潮流』勁草書房.
- 平沢慎也・野中大輔. (2022). 「認知文法から考える「意識／直訳」問題—「直訳」は本当に「直」なのか?—」『くろしおオンラインイベント 認知文法から考える「意識／直訳」問題』発表資料
- 池上嘉彦. (1975). 『意味論 意味構造の分析と記述』大修館書店.
- 勇 康雄. (1964). 「アメリカ言語学の動向(1)—Bloomfield 学説の批判—」『英語青年』第110巻,第9号. pp.14-15. 研究社.
- 磯谷 孝. (1980). 『翻訳と文化の記号論』勁草書房.
- 井上和子. (1983). 「言語学研究の動向」文部省科学研究費特定研究(1)『学術研究動向の調査研究報告』国際基督教大学.
- Jakobson, R. (1936). *Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre*. in *ROMAN JAKOBSON SELECTED WRITINGS II* Travaux du Cercle Linguistique de Prague 6. The Hague : Mouton (服部四郎編.1986. 『ロマンヤールコブソン選集1』大修館書店.)

- Jakobson, R. (1963). *Essais de Linguistique Générale*, Paris: Éditions de minuit.
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田 健編. (1993). 『言語学』 東京大学出版会.
- Koerner, E. F. K. (1973). *Ferdinand de Saussure*. Braunschweig : Vieweg. (山中桂一訳. (1982). 『ソシュールの言語論』 大修館書店.)
- 小林英夫. (1932). 「ランゲージュの概念の疑義解釈」 東京大学国文学研究室編『国語と国文学』 第9巻, 第7号. 至文堂. pp.1-23. (小林英夫. (1935). 『言語学方法論考』 三省堂. ならびに小林英夫. (1976). 『小林英夫著作集 1 言語学論集 1』 みすず書房. にも再録)
- Martinet, A. (1960). *Eléments de linguistique générale*. Paris: A. Colin. 宅徳嘉訳. (1972). 『一般言語学要理』 岩波書店.)
- Mauro, T. (1967). *Ferdinand de Saussure CORSO DI LINGUISTA GENERALE Introduzione, traduzione e commento*. Bali : Laterza. (山内貴美夫訳. 1976. 『ソシュール一般言語学講義校注』 而立書房.)
- Mounin, G. (1968). *Saussure ou le structuraliste sans le savoir*. Paris : Éditions Seghers. (福井芳男・伊藤 晃・丸山圭三郎 共訳. (1970). 『ソシュール』 大修館書店.)
- 村木正武・斎藤興雄編. (1978). 『現代の英文法 2 意味論』 研究社.
- 中島文雄. (1939). 『意味論』 研究社.
- Nida, E. (1964). *Toward A Science of Translation*. Leiden, Netherlands: E. J. Brill. (成瀬武史訳. (1971). 『翻訳学序説』 開文社出版.)
- Nida, E. & Taber, C. & Brannen, N. (1969). *The Theory and Practice of Translation*. Leiden: Published for the United Bible Societies by E.J.Brill. (沢登春仁・升川 潔訳. (1973). 『翻訳—理論と実際』 研究社出版.)
- Ogden, C. K. & Richards, I. A. (1923). *The Meaning of Meaning*. London: Routledge and Kegan Paul. (石橋幸太郎訳. (1963). 『意味の意味』 興文社.)
- 太田 朗. (1963). 「アメリカ流言語学」 『英語青年』 第109巻, 第10号. pp.8-9. 研究社.
- Sapir, E. (1953). *Le langage : introduction à l'étude de la parole*. Paris : Payot. (泉井久之助訳. (1957). 『言語』 紀伊国屋書店.)
- Saussure, F. (1916). *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot. (小林英夫訳. (1972). 『一般言語学講義』 岩波書店.)
- Skinner. B. F. (1957). *Verbal Behavior*. APPLETON-CENTURY-CROFTS, INC.
- Wertheimer, M. (1912). Experimentelle Studien über das Sehen von Bewegung. In *Zeitschrift für Psychologie* 61. pp.161-265. (English translation in Shipley, T. ed. 1961. *Classics in Psychology*. New York: Philosophical Library.
- Wittgenstein, L. (1953). *Philosophical Investigations*. Oxford: Basil Blackwell & Mott.
- Yule, G. (1985). *The Study of Language: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press. (今井邦彦・中島平三訳. (1987). 『現代言語学 20 章—ことばの科学』 大修館書店.)